



水星交響楽団第31回定期演奏会
2003年8月31日(日) 午後2時開演
東京芸術劇場大ホール



ご挨拶 & 本日のプログラム

今日は、残暑厳しい折り、お忙しい中、私ども水星交響楽団の定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。当楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の若手OBを中心に結成されましたが、お蔭様で、来年には創立20周年を迎えることになりました。20年という歳月には正直そんなに経ったのかという感慨しかなく、本当にひたすら「やりたいことをやる」という結成時以来のモットーを実現すべく走り続けてきただけでした。結成時のメンバーは、「若手OB」と書くには若干憚りもあるようになってきましたが、その中で変わりなく活動を続けてこられたのは、音楽を創っていくのに年齢差・上下関係は全く関係なしという意識をずっと維持してきたからと思っております。平日は会社組織人が多いからでしょうか、その分休日のこの自由なスタイルは決して変わることはなく、これからも水響の大きな長所として受け継いでいきたいと考えております。

さて、本日のプログラムですが、20世紀アメリカ最大の音楽家レナード・バーンスタインの交響曲第2番『不安の時代』をメインとしております。バーンスタインは申し上げるまでもなく指揮者として誰も到達し得ない大きな業績をあげましたが、作曲家としても独自のイデオロムによる優れた作品をいくつも残しております。その中でも特に3つの交響曲は、その時代内容と独自の宗教観を投影した非常に内容の濃い作品です。『不安の時代』はイギリスの詩人オーデンの同名の詩に「髪が逆立つほど」衝撃を受けたバーンスタインが、詩の章立てどおりに曲をつけたものですが、ちょうど第2次大戦直後の厭世観や信頼できるものがない人々の不安感を現しており、これは、一昨年の同時テロにはじまりイラク戦争につながる現代の状況と実に酷似していると思います。曲は現代人の孤独感を示すクラリネットソロから始まり、最後は圧倒的な救済のうちに曲を閉じますが、出口が見えない現代もこのように解決していった欲しいものです。

今回ピアノ独奏をお願いした鈴木深喜さんには、合宿を含め何度も練習にお付き合い頂きました。非常に高度なテクニックが必要で、それゆえにプロでもあまり演奏されず、ましてアマチュアではほとんど初演に近いと思われるにも拘わらず、快くお引受けいただき、また練習では圧倒的な存在感でオケをぐいぐいと引っ張っていただき、本当に感謝の言葉もありません。

また、シベリウスの交響曲第5番ですが、なんと今回が水響初のシベリウスとなります。前から何度も候補にあがりようやく実現したわけですが、やはり初物ということもあり独特の語法に慣れるまで、かなり時間がかかりました。全曲を貫く透明感と高揚感をうまく表現できればと思います。

ウォルトンは一昨年の定演アンコール『宝玉と王の杖』以来で、これも本プロ初登場の作曲家です。非常に芸達者な英国人奏者を想定して書かれていますので、曲の雰囲気以上に技術的に難しい部分が多かったのですが、その難しさを感じさせずに軽妙な感じをうまくだしていきたいと思います。

今回のプログラムは、一般的にはなじみの少ない曲目が多いですが、各作曲家を代表する名曲ばかりです。皆様は演奏をお聴きになって、少しでも曲を気に入っていただき、CDも聴いてみたいなど思っただけであれば、演奏者冥利に尽きるというものです。今日は、ごゆっくりお聴きください。

最後になりましたが、例によって大変な曲ばかりお願いして本当にご苦勞をおかけしている常任指揮者の齊藤栄一先生、いつも非常にお世話になっている一橋大学管弦楽団の皆様をはじめ、ご指導いただきました多数の皆様には厚く御礼申し上げます。

水星交響楽団運営委員長 植松隆治

ウィリアム・ウォルトン

William Walton

ヨハネスバーク祝祭序曲

Johannesburg Festival Overture

ジャン・シベリウス

Jean Sibelius

交響曲第5番

Symphony No.5

★★ 休憩 ★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

レナード・バーンスタイン

Leonard Bernstein

交響曲第2番「不安の時代」

Symphony No.2 "THE AGE OF ANXIETY" for Piano and Orchestra

指揮：齊藤栄一 ピアノ独奏：鈴木深喜

管弦楽：水星交響楽団

コントラバス・ソロ 刈田淳司

指揮者 & ソリストご紹介

■ 齊藤栄一(さいとう えいいち) 指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に学ぶ。また、1981年には、京都大学交響楽団とともに2週間にわたりドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮する。1982年には、関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演)の副指揮者を務める。1984年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」・ラヴェルの舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。作曲も手掛け、これまでに「スーダラ節の主題による交響的変容」(管弦楽曲)「シンフォニエッタ」(金管十重奏曲)「ミサ・プレヴィス」(無伴奏合唱曲)などを発表。また著書として、「振っても書いてもしょせん酔狂」(水響興満新報社)、「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)がある。また、最近はストラヴィンスキーの「兵士の物語」の語りで好評を博した。現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。



■ 鈴木深喜(すずき みき) ピアノ独奏

3歳よりピアノを始める。桐朋学園大学卒業。同大学ピアノソロ研究科、及び同大学弦楽部会伴奏研究員修了。全日本ソリストコンテスト第1位。宝塚ベガ音楽コンクール・ピアノ部門第1位。沖縄ムーンビーチミュージックフェスティバル、京都フランス音楽アカデミー、オランダミュージックセッションズに参加、ジョルジュ・ブルデルマシエール、ヤン・エキエル、ラザール・ベルマン各氏のマスタークラスを修了。それぞれ推薦を受け演奏会に出演。ソロでの活動の他、ながのアスペンミュージックフェスティバル、いしかわミュージックセミナー、名教授ブロン氏自身の推薦によりザハール・ブロンヴァイオリンセミナー等で公式ピアニストを務めるなど、伴奏者としての活動も幅広い。ピアノを深澤亮子、倉沢仁子、高良芳枝、故安川加寿子の各氏に、室内楽、伴奏法を三善晃、原田幸一郎、岩崎淑、故アンリエット・ピュイグ＝ロジェの各氏に師事。桐朋学園大学嘱託演奏員。



曲目解説

ウィリアム・ウォルトン ヨハネスバーク祝祭序曲

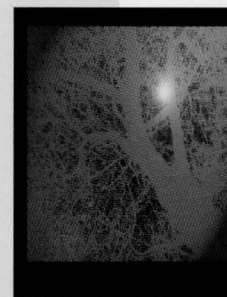
■ ウォルトンと水響

ウォルトン(William Walton 1902~1983)は、前世紀の英国の作曲家です。映画の付随音楽をたくさん書いたり、国王の戴冠式行進曲を書いたりして、英国クラシック音楽界では珍しく大衆的な人気のある作曲家ですが、日本ではまだまだマイナーな「知る人ぞ知る」作曲家です。

水響のウォルトン・デビューもごく最近になってからのことで、『宝玉と王の杖』(エリザベス女王の戴冠式行進曲)を一昨年の演奏会のアンコールで演奏したのが最初でした。音を出すまでは疑心暗鬼でしたが、エルガーの『威風堂々』のように厳かなトリオで弦楽器を朗々と歌わせる一方、速い部分では絢爛豪華に金管や打楽器を鳴らすゴージャスなつくりで、水響の面々をノックアウト。本プログラムでも近々にぜひウォルトンをとの声が高まり、本日の第2弾と相成りました。

■ ヨハネスバークなのに…

で、『ヨハネスバーク祝祭序曲』です。この曲は1956年、南アフリカ(当時はイギリス連邦に所属)第一の都市ヨハネスバークの市制





70周年記念式典のために、同市祝祭委員会より委嘱されました。

式典のための序曲ということで、厳かで荘重な雰囲気曲かと思いきや、全管弦楽による短い4発の和音の打ち込みで突然始まります。プレスト・カブリツィオーソ（非常に速く、綺想曲風に）の指示どおり、躍動感あふれるリズムと色彩的な和声感覚、軽妙でウィットに富んだメロディで、超絶技巧も何のその、ひたすら突き進み、後半ではラテンパーカッションまで飛び出して、お祭り騒ぎのうちに曲を閉じます。…とここで、「ラテン」という言葉を見て「ん??」といぶかる方も多いのではないのでしょうか。南アフリカはアフリカであって、ラテンアメリカでもラテンヨーロッパでもありません。なぜラテンの音楽がこんなところに登場するのでしょうか。

南アフリカは、最近まで非白人に対するアパルトヘイト（隔離）政策をとってきたのは周知のとおりですが、その歴史をもう少し細かく見ると、次のようになります。

1910年	英国が支配権を確立（英連邦南アフリカ）、オランダ系先住民アフリカーナの自治を認める。
1930年～	英国による経済的支配を嫌い、アフリカーナが民族運動を展開。非白人を蔑むことで自らの地位向上を企図。
1949年	アフリカーナの単独政権。アパルトヘイトと銘打ち人種隔離政策を徹底的に推進。
(1956年	「ヨハネスバーグ祝祭序曲」作曲)
1961年	国際的非難にも拘らずアパルトヘイトを固持し、英連邦を脱退、「南アフリカ共和国」として独立。
1989年	デクラーク大統領就任。国際的非難に耐えきれず、アパルトヘイト廃止へ。

また、『南ア共和国の内幕』という本（中公新書、1971年）には、著者が日本旅行の経験のある南アフリカの英国系家族を訪問したときのこととして、次のような記述があります。

「…東京はどこが印象に残ったか、と私が聞くと、次男は、『ブラックの地名は覚えにくくてね』と答えた。悪意はないようだが、彼の意識の中では、白人以外は全部『黒』なのである…」

つまり、『ヨハネスバーグ祝祭序曲』は、建前上は英国が宗主国であるものの、アパルトヘイト政策の急進化とともにその権威を急速に失ってきた頃の曲であるということと、もともと英国には、長年の帝国主義的世界支配の名残りが、白人以外はアフリカもラテンアメリカも同じだという意識が拭い難く残っていたということで、この2点を考え合わせると、アフリカ舞台の曲にラテン音楽を使ってしまう「何でもあり」さ加減は、歯止めが利かなくなった南アフリカに対する、英国のやぶれかぶれの感情の発露と、言えなくもないかもしれません。

そして、せっかくオックスフォードに入学しても音楽のために通常科目の取得に失敗して退学したり、アルゼンチン旅行時に見初めた女性と電撃結婚（1948年、46歳）、そのまま後半生を地中海の楽園イスキア島に移住して過ごしたりというウォルトンの脳天気で「何でもあり」な人生を振り返るとき、ヨハネスバーグ祝祭委員会、よくもこの当時の英国や英国系住民の状況を表現するのにびったりの人選を行ったものだ、皮肉にも膝を打ってしまうのです。

（横地 篤志）

ジャン・シベリウス 交響曲第5番

■水星交響楽団初のシベリウス

84年の創立から今年で19年目を迎える水響は第31回となる今回の定期で初めてシベリウスを採上げます。27回の「復活」、28回の「エロイカ」、29回の「マラ5」と再演が続いた後、昨年の30回記念定期でのショスタコーヴィチ「レニングラード」、直近の第2回チェンバーでのミヨー、イベール、リード、ハイドンと初物が続きましたが、今回の3曲のうちシベリウスは初となります（バーンスタインは何曲か演奏してきましたし、ウォルトンもアンコールで採上げたことがあります）。

失礼かも知れませんが今日ご来場のお客様は3曲中でご存知なのはシベリウスだけという方が大半ではないのでしょうか。また生で聴くのは3曲とも初めてという方も多いと思います（かく言う私もシベ5は過去に1度演奏しましたが、生で聴いたことはありません）。

「シベリウスっていいなあ」と思ってもらえるような演奏が出来て、シベリウス・ファンが1人でも増えて頂ければこの上無い喜びです。

■最近のシベリウス演奏 ～ ヴァンスカ/ラハティ響に注目

最近のシベリウス演奏を語る上で、99年秋に来日してシベリウスの交響曲全曲（含む5番初稿）を演奏し高い評価を得たヴァンスカ指揮ラハティ交響楽団に触れない訳には行きません。彼らによってシベリウスの新たな魅力に気付かされた人は多いと思います。私は残念ながら生で聴くことができませんでしたが、それは今でも痛恨事となっています（井上道義/新日フィルのマーラー・チクルス（これとて全部は聴けませんでしたが）とセットで買うと格安で聴けたんですが）。その後出たCDで聴いただけですが、最初の第1番を聴いただけでも従来普通に聴いてきた演奏とかなり印象が違うのに驚きました。

今秋再来日しますが、何と言っても滅多に聴けない『クレルヴォ交響曲』に注目です（今回私は東京での3回の演奏会全てを聴く予定）。12型（1stVn6プル）という小じんまりとした編成による清冽で作曲家への共感溢れる演奏、このコンビの演奏は今後のスタンダードになって行

きそうな予感がします。

ただ、残念なことに国内プロオケでのシベリウス（交響曲）演奏の機会は減って来ているような気がします（ヴァイオリン協奏曲は頻りに演奏されますが）。渡辺暁雄氏の遺したシベリウス演奏の伝統は消え去ってしまったのでしょうか（彼のシベリウスを生で聴けなかったのも悔やまれます）。マーラーの5年後輩、R. シュトラウスの1年後輩という割には作風が保守的で、一部の曲を除いては演奏効果もあまりににくいというあたりが原因なのでしょうか。

むしろ最近ではアマチュアオケのほうが積極的に演奏しているかも知れません。演奏されることが稀な3番や6番も演奏される(た)ようですし、シベリウス専門のオケも立ち上がったそうです。

■シベリウスの生涯と主な作品

ジャン（ヤン）・シベリウスは1865年12月8日に帝政ロシア支配下のフィンランド南部の都市ハメーンリンナで生まれました。幼い頃から楽才を示し10歳頃には作曲もしています。1885年にヘルシンキ大学法学部に進むも音楽への情熱は止みがたく、ヘルシンキ音楽院で作曲とヴァイオリンを学びます（当初はヴァイオリニストを目指していたようで腕前もかなりのものだった）。ベルリン、ウィーン留学から帰国後、出世となった独唱・男声合唱を伴う5楽章からなる大作『クレルヴォ交響曲』（1892年）を初演し作曲家としての名声を確立しました。1897年には早くもフィンランド政府から年金の給付を受け作曲に専念できる体制が整います。『カレリア』、『4つの伝説』（第2曲がトゥオネラの白鳥）、『フィンランディア』（愛国心を煽るとして演奏禁止となる程の独立運動の象徴となった曲）などの名作が次々に生み出されました。

交響曲第1番（1899年）の成功により国際的評価も高まり、第2番（1902年）、ヴァイオリン協奏曲（1903年、05年改訂）によりこの時期彼の創作力、人気ともにひとつのピークに達した感がありました。1904年にはヘルシンキから35キロほど離れたヤルヴェンパーに有名なアイノラ荘（妻の名アイノに由来）を建て以後生涯を暮らすこととなります。

古典への回帰を思わせる第3番（1907年）、最高傑作との呼び声も高く、極度に凝縮された内容を持つ陰鬱な雰囲気を含んだ第4番（1911年）とこの頃から作風の変化が顕著になってきます。ドイツ・ロマン派やロシア音楽の影響から離れ独自の様式を模索することになります。

その後第1次世界大戦の勃発によりシベリウスも大きな影響を受けることとなります。ロシアの参戦により契約していたブライトコップ・ウント・ヘルテル社（ドイツ）と敵国同士になってしまったこと、演奏旅行を大幅に制限せざるを得なくなったことなどです。第5番（1915年、16、19年改訂）はこうした状況下で書かれました（詳細は次項で）。

1917年のロシア革命を契機としたフィンランドの独立宣言とその後の内戦を経て、シベリウス自身が「清らかな湧き水」と評した第6番（1923年）、単一楽章形式をとる密度の高い第7番（1924年）、『タピオラ』（1926年）等を最後に事実上作曲を休止してしまいます。約30年に及ぶ長い沈黙の末1957年9月20日に脳溢血により死去、91歳の長寿でした。

■交響曲第5番（1915年、16、19年改訂）

この交響曲は第1次世界大戦前夜の1914年に着想され翌年に完成、初演は1915年12月8日シベリウス生誕50年の誕生日の祝賀演奏会で作曲者自身の指揮で行われましたが、この初稿の段階では他のどの作品の時よりも不満を持っていたようです。そして翌年と1919年の2度にわたる改訂を経て今日聴かれる最終稿が完成しました。

幸いにして我々はヴァンスカ／ラハティ響の実演、CDを通して初稿を音で確かめることができるようになりました。最も大きな違いは楽章構成ですが、これは初稿の第1楽章と第2楽章を一体化して4楽章構成を3楽章構成にしたものであるということは直ぐに理解できます。他にもオーケストレーションやコードなどが大幅に変更されているようです（さすがに初稿スコアは持っていないので詳しくはわかりませんが）。

初稿は初稿でいい所もあるのですが、やはりこの改訂は見事に成功していると思います。特に第1楽章は2つの楽章が結合されたものとは思えないほど統一感のある充実した音楽になっています。この推移部分は本当に素晴らしい一言です（演奏は難しいですが）。

前作が非常に内面的な厳しい曲だったことへの反動なのかも知れませんが、この曲は戦時中に書かれたとは思えない程全体的に明るく開放的で（あくまでもシベリウスの作品の中ではですが）、フィンランドの美しい自然が想起されるような感じがします。1915年4月21日の日記にその日眼にした16羽の白鳥が頭上を旋回する様子の美しさについて「人生最大の感動のひとつ」と記していますが、この時の印象が第5交響曲に色濃く反映しているようです。

余談ですがシベリウスが亡くなる直前に散歩に出た時、まるで別れを告げるかのようにツルが頭上を旋回したそうです。そして亡くなる当日にはヘルシンキでマルコム・サージェントが第5交響曲を演奏していたということです。

曲は以下の3楽章からなります。交響曲で常套的に使われてきたソナタ形式にはとらわれず、かなり自由なスタイルで作曲されています。

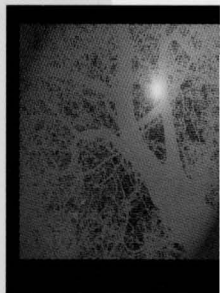
第1楽章 Tempo molto moderato 12/8 ~ Allegro moderato 3/4

第2楽章 Andante mosso, quasi allegretto 3/2

第3楽章 Allegro molto 2/4 ~ Largamente assai 2/3

楽器編成 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部

（実はシベリウスを良く知らなかったヴァイオリン弾き 川俣）





レナード・バーンスタイン 交響曲第2番「不安の時代」

「レナード・バーンスタインは作曲家であり、指揮者であり、ピアニストであり、クラシック音楽の教師でもあった。さらに、ブロードウェイ・ミュージカルも、オペラの舞台や交響曲のオーケストラの指揮台も知りつくしていた。あえてさまざまな分野にとりくんで、なみはずれた才能を発揮した。音楽にたずさわった半世紀の間、世界各地で活躍したこの天才は、じつにアメリカ人らしい人物でもあった」（バーンスタイン回顧録）

バーンスタインは指揮者として偉大な存在であったが、作曲家としても偉大な存在である。彼の代表作はあまりにも有名な『ウエスト・サイド・ストーリー』だが、この1作をもって「バーンスタインは20世紀を代表する作曲家の一人である」と言っても決して過言ではない。この作品は「誰の耳にもわかりやすく魅力的」で「深い感動をあたえる」という点において、20世紀音楽最大の金字塔のひとつであり、永遠に歴史に残るだろう。しかし、彼の作曲家としての業績が『ウエスト・サイド・ストーリー』のみに代表され、他の作品がほとんど知られていないということは、きわめて残念なことだ。

バーンスタインの作品は交響曲、管弦楽曲、オペラ、ミュージカル、バレエ音楽、歌曲など幅広いジャンルにわたって70曲以上ある。彼の音楽の特徴としては、次のふたつのことが重要だ。ひとつは、クラシック、ジャズ、ブルース、ラテン音楽、黒人霊歌、ユダヤの民族音楽、ポピュラー音楽などさまざまな音楽の要素を取り入れ、変拍子や対位法などの高度な作曲技法で結びつけたこと、そして、誰にでも口ずさめるような、やさしく、しかも美しい洗練されたメロディーが多く用いられており、きわめて親しみやすいということだ。こうした彼の音楽の特徴は、ユダヤ系アメリカ人として生まれ、アメリカが持つ多彩な音楽環境の中で育ったことの影響だろうが、それ以上に、出会う人や物すべてを愛さずにはいられなかった彼自身の性格によるところが大きい。彼は「そもそも音楽に高尚も低俗もない」という立場を貫き、音楽に優劣をつけることなく、どの音楽にも惚れ込み、自分のものとせずにはいられなかった。そのためクラシック、ポピュラーいずれの物差しでも測れない作品が多く生まれ、保守的な評論家には叩かれたが、新しいものを求める人々からは熱狂的に迎えられた。

以下主要作品を作曲順にあげてみよう。

[ポップス系] バレエ音楽『ファンシー・フリー』（1944年）、ミュージカル『オン・ザ・タウン』（1944年）、同『ワンダフル・タウン』（1953年）、映画音楽『波止場』（1954年）、ミュージカル『キャンディード』（1956年）、同『ウエスト・サイド・ストーリー』（1957年）

[シリアス系] 交響曲第1番『エレミア』（1942年）、同第2番『不安の時代』（1949年）、ヴァイオリン・弦楽・ハーブ・打楽器のための『セレナード』（1954年）、交響曲第3番『カディッシュ』（1963年）、合唱曲『チチェスター詩篇』（1965年）、劇場音楽『ミサ曲』（1971年）

ポップス系・シリアス系という区分はあくまでも便宜的なものであって、ポップス系作品といってもオペラや交響管弦楽として十分通用するものであるし、シリアス系作品も決して難解なものではない。いずれの曲も上記の特徴をもった、親しみやすい魅力的な作品だ。本日演奏する『不安の時代』をお聴きになって、作曲家バーンスタインに興味をもたれたら、ぜひ上記の作品を聴いていただきたい。とくにオススメは『不安の時代』のほか、やはりなんとと言っても『ウエスト・サイド・ストーリー』（シンフォニックダンスが有名だが、全曲版で）、『キャンディード』（これも序曲が有名だが、全曲版で）、『チチェスター詩篇』（20分ほどの短い曲だが、シンプルで美しい曲）だ。これらの作品を気に入っていただけたら、『エレミア』『カディッシュ』『ミサ曲』といったシリアス系の作品にチャレンジしていただきたい。これでほぼバーンスタインの作品が把握できると同時に、彼の作品のとりこになってしまうこと請け合いである（いずれの曲も自作自演のCDが入手可能だ）。

【交響曲第2番『不安の時代』】

『不安の時代』は、米詩人W. H. オーデンの代表作のひとつである同名のバロック風対話詩に靈感を得て作曲された作品である。作曲当時バーンスタインはスター客演指揮者としてアメリカ全土にとどまらずヨーロッパをも飛び回り、コンサートマラソンを続けていた。一方作曲では、ブロードウェイで彼の最初のミュージカル作品である「オン・ザ・タウン」が大ヒットするなど、彼がまさに成功への階段を一気に駆けのぼっていた頃の作品だ。

バーンスタインは1947年に初めてこの詩を読んだ時、髪の毛が逆立つような衝撃を受け、以来この作品に基づいた交響曲を書くのが執念となったと述べている。作曲は2年間にわたって続けられ、彼の言葉によれば、タオス、フィラデルフィア、マサチューセッツ州、リッチモンド、テル・アヴィヴ、飛行機の中、ホテルのロビー、そして初演の前の週はボストンで書かれた、とのことである。

ここでオーデンの詩の内容について触れておこう。舞台は第二次世界大戦終了間近なころのニューヨーク。三番街のある安酒場で出会った3人の男性（クワント、マリン、エムブル）と1人の女性（ロゼッタ）が、かかわりあいと信ずべきものを得ようとして話をかわすのだが、答えを見出しえない。閉店する酒場をあとにした彼等は、残りの夜をロゼッタのアパートで過ごすことにするが、その途中のタクシーの中では、「父性像」、「巨大なる父親」、すなわち、信頼に足る存在が失われたことに対する挽歌がうたわれる。ロゼッタのアパートで、彼等は再び酒を飲み、ダンスに興じ、楽しく時を過ごしていると信じ込もうとするが、白けた雰囲気はぬぐうべくもなく、薄明とともに、それぞれの道へ

■オケと弾くって? 「1対大勢に緊張」「時差に困りました」

司会：それでは本題の「オケとの相性」について移りましょう。まず、普段はソロで弾いている皆さんが、オケと共演される時はどんな気分ですか？

鈴木：どきどきしますね。1対大勢じゃないですか。まず指揮者とのコミュニケーションと、オーケストラとのコミュニケーションが2重にある。両方とも初めてだとすごく…。

佐藤：新鮮なことばかりですね。私は打楽器群の中で演奏するんですが、今まで音だけしか知らなかった楽器が、近い距離で見られるというのがすごい新鮮です。もちろん他の楽器もね、本当に近くて。ただ、難しいのは、時間差っていうんですかね。楽器との距離によって、それぞれの音に時間差を感じます。例えば、指揮と舞台奥の管楽器が少しズレる時ってありますよね。そんな時には、どういう感覚で、合わせればいいんでしょうか？

齊藤：会場にもよるんですけど、ある種の時差が出来ちゃう時、それを音で聞いちゃうとね、微妙にズレるんだよね。だから、コンチェルトの場合は、普段のシンフォニーを振るよりも、ちゃんと打点を作って振っています。遅れるって、多分ソロを聞き過ぎて、音で合わしちゃう結果なんですよ。音って、ソリストの所から来る要素だけじゃなくて、天井とか後ろからはねかえって反響したやつも耳に入る。それに合わせてるから、彼らは遅くなくなっちゃう。



■水響って? 「知性的で怖そう」「音楽を自然体で楽しむ」

司会：ところで、共演前に、水響にどんな印象をお持ちでしたか？

鈴木：最初は選ぶ曲目を聞いて、すごいなあと思いました。怖かったですよ。選曲のセンスから考えると、やっぱりすごい知性があるのかなって。

司会：それって「やまいだれ」の痴性？

鈴木：まさか!?(笑)。でも、最初に練習場に入った時は、もうねえ、すごくテンションあがっちゃって。緊張して。わーとか思ったけど、練習後に1回「さかえや」に行けば。ああよかったっていう感じでした。なんか怖いかなと思っていたのが、全然ね。とても楽しくって。本当に音楽を楽しんでいると思った。私たちみたいに専門に音楽大学でやってきた人に比べて、ある意味こう、もっと柔軟に音楽を捉えている感じがしました。だから、かえってすごく勉強になるし、教えられることとか多い。いい機会を与えていただいたと感謝しています。

佐藤：私もそうなんですけど(笑)。

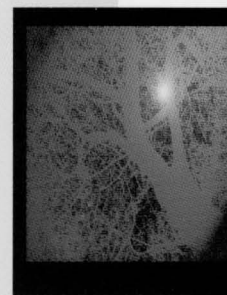
鈴木：お話ししたりして、人間のコミュニケーションがとれると、音楽のコミュニケーションもしやすくなります。1回飲み会に参加して、馴染めるっていう感じがした事は大きいですね。私、実は、ソロを弾くよりも、アンサンブルの方が好きなんです。ソロを弾いてると孤独に陥っちゃうんですよ。

佐藤：私も同じような感じですね。今回の機会は貴重というか。なかなか無いですよ。

司会：私らも頑張らなければいけません。それでは、この鼎談の結論は「1回さかえやに行けば」とさせていただくということで、お開きしましょう。

(2003年5月25日、東京オペラシティで)

Edit H. Sukenari / Text R. Yokoo / Photo H. Koide





Special Interview: ありがとう！カルロスさん 「水響って、マジメなおケです」

水響唯一の外国人プレイヤー、ヴィオラの傳冠昇さん（30）が、仕事の都合で今回の演奏会を最後に台湾に帰ることになりました。そこで、水響への思いをたっぷりと語っていただきました。

■「さかえや」で日本語覚えた

傳さんは台湾の商船会社に勤めており、2000年に東京に赴任。同年12月の第27回定期演奏会（マーラーの交響曲第2番『復活』を演奏）から水響に参加しています。愛称はカルロスさん。スペイン語教室時代のニックネームだそうですが、「覚えてもらいやすそう」と考えて、社内では「カルロス」と自己紹介をしたため、すっかり定着しました。

「水響で初めて弾いた時、マジメなおケだと思いました。指揮者が棒を止めたら演奏がピタッと止るでしょう。台湾はそうも行きません。それに1年以上前の活動予定まできちんと立てることは、職場でもなかなかありませんよ」

入団当時は日本語がほとんど話せず。指揮者の指示は、パートトップや隣で弾いた人が逐一、英語に訳して伝えていました。彼に取って、日本語を学ぶための貴重な場だったのが、練習終了後に団員が押しかける大衆酒蔵「さかえや」だったそうです。

「仕事ではあまり日本語は使いません。ですが、お酒を飲みながらだったら、何でも話せるし、分からないことも聞けます。ペンと紙を持って会話するよう心がけました。練習では同じパートの田北佐和子さん、永井好さんに大変お世話になりました」



■食べられなかった「煮込み」

いつしか、カルロスさんは「さかえや」の常連になりましたが、意外な事実も。

「私は魚や内臓肉が苦手。刺身とか、煮込みとか、いわゆる居酒屋メニューは、ほとんど食べられないんですよ。でも、1人で過ごすのは寂しいので飲みにはよく行きます。日本人って、疲れている時でもお酒を飲むのには驚きました。水響の人の飲み会でのマナーですか？自分たちの飲む量をコントロール出来ているのは、さすがだと思いました」

■鈴木さんと1度ラーメンを

水響のない休日は会社の同僚とテニスや旅行を楽しみました。これまで北海道、関西、黒部、館山、大分を回り、さらに国境を越えてサハリンまで旅行したそうです。

「日本で好きになった食べ物はカツ丼にラーメン。『さかえや』ではから揚げが気に入りました。ヴァイオリンの鈴木尚志さんは、ラーメンに大変詳しいと聞いているので、ぜひ一度連れて行ってもらいたいですね」

■台湾でもマーラーを！

小学校時代にヴァイオリンを始め、大学でヴィオラに転向。大学時代はプロの高雄市交響楽団でアルバイトしたほどの腕前です。卒業後は、台湾唯一のアマチュア・オケの台北市民交響楽団で弾いていました。現地のオケのレパートリーはドボルザークやチャイコフスキーが中心。水響得意のマーラーやラヴェル、バーンスタインの曲はほとんど演奏されていないそうです。

「帰ったら、マーラーの良さをもっと広めたいですね。それに、ぜひ、水響の皆さんも演奏旅行に来て下さいね」

もちろん、ぜひ行きたいです。

(Text:H. Sukenari / Photo H. Koide)



水星交響楽団

合奏トレーナー：野崎 知之
弦トレーナー：小田 透
金管トレーナー：山田 裕治
副指揮者：榎原 尚徳

1st Violin

生駒 陽子
大塩 昌来
大軒 敬子
黒川 夏実
鈴木 尚志
鈴木 牧
土屋 和隆
豊田 由起
西端 雄一
野村 国康
福地 由樹子
松木 まどか
松本 祥世
吉田 健一郎

2nd Violin

石川 めぐみ
大平 あかね
川俣 三枝子
北島 綾乃
小林 美保子
斎藤 晶子
斎藤 佐江
祐成 秀樹
徳地 伸保
浜田 浩子
林 昌英
米嶋 龍昌

Viola

有井 晶
井上 拓
川俣 英男
木村 納
金 純子
小松 聡
田北 佐和子
佃 秀昭
傳 冠昇
福島 恵一
藤岡 洋平
松岡 正人

Violoncello

菅田 克彦
鈴木 皇太郎
高原 学
橋 温子
仲村 正江
中山 憲一
中山 佐知子
日吉 実緒
堀内 純一
三輪 恭子

Contrabass

大西 功
柏山 聡子
金子 千春
刈田 淳司
長屋 裕大
本多 美佐子
宮嶋 順也

Flute

刈田 淳子
川崎 裕恵
本田 洋二
横尾 良子

Oboe & English Horn

小出 裕之
進藤 彩
野口 秀樹

Clarinet

大山 泰広
河西 亮子
西村 伸吾
横地 篤志

Bassoon & Contra Bas-

soon
高橋 健
富井 一夫
渡辺 さつき

Horn

伊集院 正宗
榎原 尚徳
岡本 真哉
北 典子
桑名 久美
小松 泰三
東森 智史
山形 尚代

Trumpet

浅田 健二
家田 恭介
岩瀬 世彦
金子 恭江
桜井 新
田玉 詩織

Trombone

櫻井 統
佐藤 幸宏
瀬古 義久
高橋 康昭
中村 佳央

Tuba

植松 隆治

Percussion

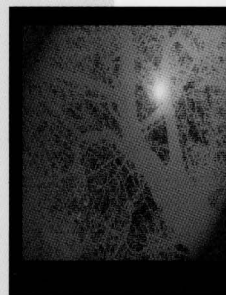
石川 誠
高橋 淳
野川 真木子
山本 勲
吉村 恵一

Piano &

Celesta
佐藤 美喜

Harp

東森真紀子





編集・校正：すけなり&りよ
デザイン：KOIDE
印刷：株式会社 三六工芸印刷社